

インホーメーション サーキュラー No. 7

内 容

I	選挙について	1
II	運営委員会報告	3
III	DGDについての報告	5
IV	サーキュラー原稿募集	5
V	寄 稿	6
	大会雑感・話題・プロフィール	
VI	会 員 変 動	9
VII	第4回大会について	12

日 本 発 生 生 物 学 会

京都市左京区北白川追分町
京都大学理学部植物学教室内 (606)

I 選挙について

第2回の選挙は、九州大学の方々に選挙管理委員会を構成していただき、次のような要領にしたがって施行されます。できるだけ多くの方々の御投票をお願い申し上げます。昨年暮に実施の予定でしたが、郵便事情を恐れ少しおくらせたところ、庶務幹事の手ちがい
が重なり大変おそくなりました。おわび申し上げます。

第2回会長および運営委員選挙について

総会での諒承にもとづき、選挙管理委員会で別記のような第1回の会長および運営委員選挙についての施行細則を定めました。下記の点に御留意の上、郵送による投票をお願い致します。

1. 選挙に必要なものとして、下記のものが同封してあるので確認して下さい。
(イ)会員名簿 (ロ)投票用紙 — 会長第1次用、第2次用および運営委員用計3枚
(ハ)投票用紙封入用封筒2種類3枚 (ニ)郵送用封筒2枚、大会参加者には(イ)は渡しずみ。
2. 選挙人および被選挙人は名簿および本号のサーキュラに掲載されている全通常会員です。
3. 会長については、第1次選挙で決まらない場合、上位得票者3名を第2次選挙の被選挙人とします。したがって第1次選挙の結果にもとづき、あらためて郵送による第2次選挙をハガキでお願いします。
4. 2種の投票用紙は、それぞれ会長用、運営委員用の封筒に入れ厳封の上、郵送用封筒に入れ(15円切手貼付)選管宛郵送して下さい。
5. 投票切は、2月15日午後4時としそれまでに到着したもののみを受付けます。切日時までには必着するよう郵送して下さい。
6. 大会準備委員会から問合わせの事項を記載した用紙は、投票用紙を入れる封筒に入れず、直接郵送用封筒に入れて下さい。
7. 開票は2月15日午後4時から九州大学理学部生物学教室内で行ない、会員に公開します。変更の時は、同教室内に掲示します。

1971年1月20日

日本発生物学会第2回会長・運営委員選挙管理委員会

川上 泉 (委員長) ・ 山元 寅男 ・ 林 宏文 ・ 山名 清隆

和田 薫 (以上 委員)

会長選挙施行細則 (暫定)

第1条 本細則は会則に定められた会長の選出に関する手続である。

第2条 選挙の施行に関する一切の管理は選挙管理委員 (委員は委員会を構成し、1名を委員長とする) の責任の下で行なう。

第3条 選挙は通常会員の単記無記名投票によって行なう。

1. 投票用紙は選挙管理委員会所定のものに限り、所定の期日までに到着するよう郵送されなければならない。
2. 投票用紙には被投票者の姓名を明記すること。ただし、同姓同名の被選挙人が2名もしくはそれ以上ある場合は、住所・所属機関名などを付記すること。

第4条 第3条に従って記載された投票を有効とする。ただし、2名もしくはそれ以上記名されたり、なに人を指すか判別不可能な記名があった場合は無効とする。その他の有効・無効についての決定は選挙管理委員の協議によって行なう。

第5条 第1次選挙において有効投票の過半数を得たものを当選者とする。過半数を得たものがない場合は得票数の多いもの3名を第2次選挙の候補者とする。ただし、上位3番目までに同数得票者があり、その総数あるいはそれより上位の得票者を含めた数が4あるいは、それを越える場合には、これら同数得票者を第2次選挙の被選挙人とし、第3条に従って単記無記名投票とする。

第6条 第2次選挙において最多票を得たものを当選とする。ただし最多得票者が2名もしくはそれ以上ある場合は選挙管理委員の抽選によって当選者を決定する。

第7条 選挙の結果はただちに会長に報告され、当選者への通知は選挙管理委員長名で行なわれる。

運営委員選挙施行細則（暫定）

第1条 本細則は、会則に定められた運営委員の選出に関する手続である。

第2条 （会長の場合と同じ — 省略）

第3条 選挙は通常会員の14名連記無記名投票によって行なわれる。

1. 投票用紙は選挙管理委員会が定めたものに限りに所定の期日までに到着するよう郵送されなければならない。
2. 投票は14名連記とし、被投票者の姓名を明記すること。ただし、同姓同名の被選挙人が2人もしくはそれ以上ある場合は、住所・所属機関などを付記すること。

第4条 第3条に従って記載された投票を有効とする。ただし記名された数が14名に過不足のある場合は無効とし、連記された14名中、なに人を指すか判別不可能な記名があった場合は、その記名だけを無効とし、他は有効とする。その他の有効・無効についての決定は選挙管理委員の協議によって行なう。

第5条 当選者は得票数の多いもの14名とする。ただし、得票数で上位14番目までに同数得票者があり、その総数あるいはそれより上位の得票者を含めた数が15あるいはそれを超える場合は下位の同数得票者について選挙管理委員の抽選により当選者を決定する。

第6条 会長が運営委員より選ばれた場合は次点者をくりあげる。

第7条 （会長の場合と同じ — 省略）

Ⅱ 運営委員会報告

昨年11月20日（11時～18時）京都府立文化芸術会館で第4回運営委員会が開催された。主な内容は次の通りである。

1) 日本で発発生生物学に関する国際会議開催の要請について

この件についてはここ数年間非公式に諸外国から個人的に希望がよせられていたが、1969年5月16日付の書簡で、I.S.D.B（国際発発生生物学協会）の会長 A.Monroy 教授から団会長あてに公式の希望が表明されてきていた。その後団会長から運営委員に手

紙で、また運営委員会に話題の形で、提出されてきたが、団会長が昨年秋 IUBS (国際生物学連合) 理事会に出席された時に、再度この件について強く希望され、諸状勢からみて真険に検討する必要がある。この国際会議は、ISDB スポンサーシップで行なわれてきた過去2回の例(第1回は1969年フィンランドで Morphogenetic tissue interactions という題で、また第2回は1970年イスラエルで, Environmental factors in cell differentiation というテーマで行なわれた)になるうものと考えて差つかえないようだが、比較的小規模の形で行なうことがのぞましいようである。勿論、もし日本で開催することになれば、独自の判断で主題や形態を決めることになるが、委員会では規模、主題、経済的問題、主催の世話人の問題など、あらかじめ問題となる諸点について自由に討議が行なわれた。その結果、前向きに対応することになり、主題等については団会長と相山委員の間でより詳細な打合せをお願いすることになった。新会長新運営委員会の下で、あらためて討議されることになった。

2) 和文誌の扱いについて

編集委員会(岡田主幹)から、現在の発牛生物学誌を従来の形式でつづけるかという、一つの岐路にあるのではないかという意見が出された。その理由は、イ) 発牛生物学関係の知識・情報は学会と関係のない人にもかなり強い要望があり、現在の形のまゝでは、それに対し適切な機能がはたせないのではないかと思われる。ロ) 発牛生物学誌は実験形態学年報以来の伝統があるが、その中にあったレビューおよび啓蒙的なものは、別の形で配布経路にのせた方がよいのではないか。岩波で学会編として出した単行本のようなものが希ましいのではないか。この問題については、会費・会則との関わりもあり、より討議を重ねてあらためて和文誌委員会から提案されるものをサーキュラーで報告する予定である。

3) その他

欧文誌について出来るだけ早くクォターリーになるようにしたいが、1号を年始めに合わせるため、会計年度との関係をどう調整するか等討議された。

また、関連学会と本学会の共通問題についても話題が出された。

Ⅲ DGD についての報告

DGD編集主幹 相山 正雄

DGD 12巻3号をただ今編集中であります。DGDを季刊誌にして年4回発行するという当初の計画は、各編集委員の御協力と会員各位の御協力によって、ほぼ順調になりました。発行期日の点でまだおくれがらありますが、今後努力いたします。昨年お引き受けしてから今日までに寄稿原稿は62篇を数え、現在レフェリー回覧中または打合わせ中のものやOKずみのものは15篇あります。

原稿が多く寄せられて誠に幸であります、多いだけに手続きがおくれがらになることもあり、この点寄稿者におわびいたします。内容や文章の完全な論文はレフェリーにまわしても数日でOKとなってもどりますので、こういうのは投稿の順に拘らず早く出版になります。優秀な原稿を今後ともお送り下さるようお願い申し上げます。(1970年12月記)

Ⅳ サーキュラー原稿募集についてのお願い

庶務幹事が少々なまけており、サーキュラーがややおくれがらですが、この際サーキュラーに会員の交流の場としての役割をもたせることにより、より定期化し、発生物学という、微生物から高等哺乳類までを対象にした学問について、いろいろのお話を、人の両から、理屈や現象の面から、手づきの面から等々出していただけないでしょうか。近来、なんでもかでもと情報量が多くなって、大切なものを知ってて知らずにいたり、全く知らずにいたり、ということも少なくないと思います。学生の方にもよんでいただけるような内容が有難いと思います。このような誌上の交流は、体裁をあらかじめ決めたりするものではないでしょうが、一応次のような項目が考えられます。

研究室紹介・プロフィール・国際会議や関連学会の紹介・和洋関連書の紹介・カーレント・トピックス・大会に対する意見・学会に対する意見・その他資料的なもの。

今回は3月に出しますので2月中に原稿をおとどけ下さい。

原稿は400字詰横書き用紙を用い、400字から800字以内でおまとめ下さい。採否などとかたぐるしいものの筈ではありませんが、サーキュラー印刷能力(経済的理由)

に限りがあり、あまり多いと、時期を失ずることがあるかも知れませんし、同一主題のものが複数ある場合なども考えられますので、ときによっては、投稿者と相談させていただき、字数を少なくしたり、幹事側で、まとめさせていただくこともおこるかも知れません。編集上のことは主として庶務幹事が行いますが、上のような問題があります時は、幹事長、会計幹事三者打合せをいたしたく存しております。

サーキュラーへの寄稿の件は運営委員会で諒承を受けましたが、募集前に、この号に、一、二のものを直接おねがいし（天沼氏・田中氏）、また事務局で紹介したもの（プロフィール）を入れてみました。

原稿は、当分の間庶務幹事（京都市上京区烏丸今出川 同志社大学生物学研究室 加藤憲一）か学会本部あておとどけ下さい。

V 寄 稿

大会 雑 感

第3回大会は大阪市立大学理学部生物学教室の会員がお世話をさして頂くことになり、日本植物生理学会と合同で、3月27日～30日の4日間神戸女子薬科大学で開かれた。この間の事情については、科学7月号に、増田芳雄氏によってのべられているので、読まれた方も多いと思う。

私も準備委員のひとりとして、このたびの大会についてのべ、また皆様方の今回の大会についての御批評を頂きたいと思う次第である。

合同大会を開く意義については、シンポジウムに重点をおき、「生命現象の再構成とインテグレーション」というテーマをとりあげた。このような大きな構想をもった内容の具体化には多くの困難が伴い、折からの大学紛争で十分な準備がとれないままに大会が開かれた。したがって結果としては、期待にそったものとは思えないが、その意図だけはいくんで頂きたい。

第2回大会の時でさえ、大学紛争の影響が考えられていたので、今回は講演申し込み数の大巾な減少が考慮されたが1月末のプログラム編集時には発生物学会の一般講演は62となり、合計では一般講演127の多数になった。さらにその前記の合同シンポジウ

ムのほか、ふたつのシンポジウムが開かれることになった。このため会期は4日間になったが、これは学会として、少し長すぎるようであり、後半は必ずしも盛会とはいえない状況になった。また合同大会であるため、運営委員会等の会議は夜間に開かれるなど、とくに役員の方々にはご迷惑をおかけすることになった。この点ここにおわび申し上げる。

二つ以上の学会が合同で学会やシンポジウムをひらくのは、もちろん有意義な点が多くはない。しかし、それぞれの学会の運営方針や性格がことなるので — 具体的には講演要旨のとりあつかいとか、予算の執行面など — 準備段階で十分考慮しておかなければならない。合同の準備委員会としては、屢々意見の一致にお互の譲歩と協力が必要とされた。

もともと発生物学会は、発生物学関係者が所属学会を超えて単一の研究交流の場をもつことを趣旨としているので、この点からみればあえて合同の学会をひらく必要はないという考え方も当然であるが、両学会に所属している会員からみれば、合同大会をひらくことに少しの抵抗も感じないし、その有意義な面が強調されてることもまた当然であろう。私は発生物学会だけの会員であり、個人的には、単独学会をひらく方が、いろいろの点で容易であったと思う。しかし教室の両学会会員が集まって、協議を重ねた結果合同大会の意義を認めて開催に決定した次第であった。この点お世話させて頂いた私たちの意のあるところを理解して頂ければ幸である。(第3回大会委員 天沼 昭 記)

話 題

組織誘導と発癌

間葉細胞が正常上皮細胞の増殖、分化に重要な役割を果たすということは、Billingham 一派によって強調されてきたが、さらに Grobstein による上皮-間葉系の確立により、組織誘導の問題は単に分化の面のみならず、発癌のしくみを明らかにする上にも重要な課題であることが次第に認識されるようになった。

Globerson と Auerbach は、マウス胎児の肺、あるいは胸腺は、発癌剤ウレタン処理によって分化が抑制されるか、間葉組織あるいは骨髄細胞の添加によりその影響が回復することを明らかにした。又、Taderera は、マウス胎児肺組織はニワトリ胎児間葉組織の存在により分化を示すが、この系にRSVを感染させると、RSVはニワトリ間葉組織のみに増殖し、マウス肺の分化異常が起ることを報告している。一方、Dawe はポリオマウイルスを用い、マウス胎児の唾液腺上皮癌の発生は、間葉組織の存在においてのみ可能であることを明らかにした。このような事実は、発癌過程における間葉組織の重要性を

暗示すると共に、発癌剤の作用は、直接標的細胞に作用し癌化を誘発するという考え方の他に、その作用が誘導系細胞に及んで、結果として起る標的細胞の異分化が癌化の原因になるのではということが臆測される。(愛知県がんセンター研究所 田中 達也 記)

プロフィール

東京大学海洋研究所の金谷晴夫氏は、昨年4月、法王庁科学アカデミーから、氏のヒトゲノムの生殖現象を支配する物質についての一連の研究に対して、ピオ11世記念ゴールド・メダルを受賞されました。このアカデミーは1936年ピオ11世によって創設されたもので、メダル受賞は1961年から毎年1人行なわれ、金谷氏が10人目です。比較的若い科学者で国際的評価のある人が受賞対象者として選ばれることになっており、もちろん我国からは始めてです。選定はアカデミー評議会で行なわれるそうですが、会員には、ボジキン、セント・ジョルジィ、ヘス、ヘルスタデューズなど生物学関係でなじみ深い名もみえ、日本では湯川秀樹・水島三一郎両博士がなっております。金谷博士に心からお祝いを申し上げたいと思います。

なお、受賞内容および業績一覧は、“L'attribution de la medaille d'or PIE X 1970”として法王庁から出版されております。(庶務幹事 記)

VI 会 員 変 動

所属・住所変更

安 倍 紀一郎	長崎大・医・第一生理
入 江 勇 治	愛知学院大・歯・薬理
江 上 信 雄	東大・理・動
太 田 吉 彦	静岡大・理・生
河 本 典 子	岐阜大・医・第一生理
京 野 洋 子	労働省労働衛生研究所・神奈川県川崎市木月住吉町2051
近 藤 昭 夫	東邦大・理・生 羽志野市泉町2-1-37
沢 野 啓 一	東京都立大森高校定時制 生物学教室・東京都大田区西蒲田2-2-1
杉 浦 靖 夫	東京都目黒区青葉台3-18-10 上目黒住宅903(〒153)
高 橋 敬	京大・理・生物物理
恒 松 康 彦	京大・理・生物物理
豊 島 久美子	塩野義研究所726号 大阪市福島区鷺洲2丁目47
西 田 隆 雄	東大・農・家畜解剖
野 口 政 止	① 東京都世田谷区南烏山町6丁目10番4-308
花 岡 謹一郎	群馬県勢多郡富士見村横室888-6
福 本 理	名古屋市立大・教養・生
星 野 喜一郎	青森県浪打2-15-8
牧 野 彰 吾	埼玉県立川越農業高校 埼玉県川越市小仙波町5-14-5
渡 辺 彊	東北大・理・生
粟 田 英 紀	関西医大・微生物学教室

改 姓

高 崎 裕 子 (旧姓 早川)

新入会

芦 田 謙 治 京都市左京区下鴨北園町106
石 原 勝 敏 埼玉大・理工・生化

河合 武 農林省・農業技術研究所・神奈川県平塚市中原1519
工藤 重治 群馬大・医・第一解剖
橋口 勉 鹿児島大・農
三上 光布 青森県弘前市和徳俵元158 (〒036)
生物研究会 愛媛大・教育学部内
上見 幸司 慶応大学病院産婦人科学教室第二研究室 (東京都新宿区信濃町35)
長崎 紘明 東京教育大・理・動物
山本 良一 ①松原市天美西1-3-34
中村 運 甲南大・理・生
菊山 宗弘 阪大・理・生
谷本 英一 大阪市大・理・生

退 会

品川 恭徳
谷口 実
戸 莉 近太郎
中尾 泰右
三宅 章雄

誤 植 訂 正

	誤	正
相 原 宏	北足郡	北足立郡
市 川 純 彦	〒062	〒063
岩 崎 尚 彦	沢良市町	沢良木町
碓 井 益 雄	理・大	理・動
受 島 敦 美	解	三 解
小 森 誠 一	小林誠一	小森誠一
腰 原 英 利	理・物	理・動
水 野 三木朗	三木郎	三木朗
	岐阜県安入郡	岐阜県安入郡
御 田 友 道	友 直	友 道
山 口 隆 男	熊本大学実験所	熊本大学臨海実験所
J.W. Nace	Ain Arbar	Ann Arbor

VII 第4回大会について

今年8月下旬に九州大学において行うことになりましたが、大会の企画についての御希望御意見をおよせ下さい。選管をひきうけている関係で、投票用紙をおとどけいただく折、投票用紙入れの封筒に入れずに、直接郵送用の封筒に御意向をお書き下さったものをおとどけ下されば幸いです。

第4回大会準備委員会（委員長 川上 泉）
福岡市箱崎 九州大学理学部生物学教室内

..... き り と り 線

大会についての意見

記名者御氏名

一般講演について	他の企画について その他